

枚方市マナビスト講座「塔本シスコが花開いた枚方ライフ」

講師 岐阜県美術館学芸員鳥羽都子氏

日時 2024年10月27日（日）13時半～15時

会場 枚方市立御殿山生涯学習美術センター・ホール

目次(スライド)

- (1) タイトル
- (2) 生い立ち
- (3) ≪シスコの女神≫1960
- (4) ≪秋の庭≫1967
- (5) シスコ・パラダイス
- (6) ≪山つつじ≫1971
- (7) ≪井戸≫
- (8) ≪長尾の田植風景≫1971
- (9) ≪絵を描く私≫1993
- (10) ≪春の庭≫
- (11) ≪秋の庭≫1990
- (12) ≪NHK がやってきた≫1995
- (13) 『塔本シスコはキャンバスを耕す』
- (14) 畑写真資料
- (15) 枚方市招堤小学校 (1983)
- (16) 招堤小学校の航空写真 (1972)
- (17) ≪山田池の春≫1992
- (18) 山田池公園風景写真 1 山田池公園風景写真 2
- (19) ミーのキャットフードをもって
- (20) ≪花しょうぶの精≫1985
- (21) ≪山田池のもみじがり≫2000
- (22) ≪シスコ牛年≫1997
- (23) ≪山田池春のスケッチ≫1998
- (24) ≪枚方総合体育館前のコスモス畑≫1996
- (25) 枚方地図資料
- (26) ≪造幣局の桜≫1987
- (27) ≪野外彫刻展≫1995
- (28) ≪アイサツスルネコ≫1996・≪三匹のネコ≫1996
≪ヒルネテルミーです≫2001・≪ミーはよか男ブサンアジア大会≫
- (29) ≪アロエの花は冬に咲く≫1995・≪アロエの花≫2004
アロエ写真資料

- (30) シスコの女神
- (31) ≪88才のプレゼント≫ ≪90才のプレゼント≫
- (32) ≪シスコの月≫
- (33) シスコさんが花開いた枚方ライフ
- (34) シスコさんのどこがすごいのか
- (35) 時代とともに、時代の先に
- (36) シスコさんを応援したくなる気持ち

(1)塔本シスコが花開いた枚方ライフ

今ご紹介にいただきましたように中学時代に藤阪で、高校から30代前半ぐらいまでは長尾台の方で過ごしておりました。今そこにいらっしゃるシスコさんのお孫さんと高校が一緒に、ちょっと私の方が年上でギリギリ被ってないかなんですけど、恩師も一緒だったりします。いつか枚方に美術館ができればその学芸員になりたいなと思っていました。また、シスコさんの絵をいつか枚方で紹介したいと思っておりますのでまあちょっと夢がかなったような感じで、今日ここでお話させていただけることを大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

シスコさんについて直接ご存知だったって方いらっしゃいますか。あすごいすごいです。むしろ今日はそのお話を聞きたいぐらいですが、例えばどういうお知り合いだったんですか？

会場：<すみません同じ田舎で九州・天草の出身です。

なるほど、九州の！そちらのメガネの方は？

会場：<私はあの同じ団地に住んでおりました。そしてお部屋の方に一度上がりませんかということで彼女の絵がいっぱいあるお部屋に訪問してもらったっていうのは一回だけなんです。いつも団地のところの大きな壁のところキャンパスを置いて描かれてたっていう記憶はございました。

なるほど。どうもありがとうございます。今日はそういう方がたくさんいらっしゃると思えます。まあ研究職としてそのシスコさんのことを情報を集めていきたいんですね。でいまの段階ではどうってことない記憶のようなことでもこれから20年50年経つてくると、作家にとっても非常に貴重なエピソードだったりしますのでぜひ書き留めていただいたり、後ろに枚方市市役所の方もいらっしゃいますし、枚方市とか岐阜県美術館の方にメールをくださったりするなどしたらいいと思います。今日それを一つお伝えしたいと思ってきたのもうしよっぱなからそれをお伝えできてよかったです。逆にですね、塔本シスコさんについて今日初めて聞く機会だという方いらっしゃいますか？はいありがとうございます。じゃあ折角ですのでそういう方にもシスコさんを知っていただきたいですので、ちょっと知ってる方には知ってる情報もあるかもしれませんがもしもお話をさせていただきます。で特にですね、塔本シスコさん、枚方にいたからこそ花開いたという画家人生がございましたので今日はシスコさんの長い90年以上の人生の中でも枚方での生活について詳しくお話をさせていただきます。

(2)シスコの生い立ち

お名前がちょっと変わってますよね。モダンなお名前なんですけれどもこちらは生まれてすぐに養女にもらわれていったんですけれどもそこのお父様が、サンフランシスコにあって、まあ当時夢を持って日本人が色々アメリカに移住した時代でしたので、サンフランシスコに行きたかったなあっていう思いを込めてこういうお名前をつけられました。今から百年ちょっと前ですね、大正時代に熊本県の松橋ということでお生まれになりまして、先ほど天草のご出身という方がいらっしやいましたけどまあ海に面した干拓地ですね。埋め立てて農地にしているみたいな平野ですね。それがすごく今からご紹介する絵に関わってきてます。やはり大変水に苦労したりシスコさんの家にはいい水が出る井戸があったけれども、まあその水を汲むのがちょっと大変だとかそういうことが彼女のモチーフにもすごく関係していきます。

当時は良くあったことだと思うんですけれども、生まれてすぐ親類筋の家に養女に行かれました、でその養父母のとおのおじいさんおばあさんですね、養父母の家で可愛がられて十歳ぐらいまで育ちます。でその時の思い出を絵の裏に書いてるんです。シスコさんはとても絵と生活と書くこと、まあ文字を書くことが一体化している。でこの辺りはいわゆる専業画家プロ画家みたいなあり方ととても違う。とても好きなのが真ん中あたりですね、「夜はおじいちゃんとおばあちゃんと二人で腕ワクの下に挟んでちちをあたためて、私しにくれました。」その時代電子レンジとかないからここ（脇）でちょっと人肌にしてくれました。であのサンフランシスコに行きたかったお父さんがですね、なかなかこう地道に漁業とか農業する人ではない夢追い人ですね。家業に専念しないがために、もともと裕福なうちだったのがだんだん傾いてきて、まあそういうこともあって十歳ぐらいの時に養父母の家に戻るんです。けどその時に養父母にはたくさん実の弟や妹が生まれていたと。でまあ農業なんか慣れてないのでお母さんに「あんた何やってもできん子かね」一ちょっと九州弁がうまくしゃべれませんけど、そういうこと言われながら手伝いをしてたんですけれども、とうとう四年生で学校を辞めなければいけなくなった。子供の頃から絵を書くのが好きな少女だったけれども小学校四年生ぐらいで学校を辞めなければならなくなった。

(3)シスコの女神

20 歳ぐらいの時にですねお見合いをする相手があって、なかなかこうイケメンの旦那さんにご結婚されるんですね。結婚された後十年ぐらいは子どもがお生まれにならなかったの、うさぎとかチャボとかを飼って、とても優しい旦那さんと仲良く暮らしてました。ただ中には戦争なんかも挟みながら2人子どもをもうけて育てられた。シスコさん46歳の時にこのご主人が事故で急に亡くなってしまわれると、その二年後にはシスコさんは軽い脳溢血に倒れられてしまって、ちょっと左半身にしびれが残るような状態だったんですね。でそのリハビリのためにこの不知火海の砂浜から石を拾ってきて彫った。これ《シスコの女神》、多分包丁とかそういう家にある道具で掘ったんですよ。シスコさんと名付けてくれ

たお父さんもこういうことをしてたりしたようですので、ちょっと遊び人の父さんだったかもしれないけど影響をうけているといえる。でまあそういうことで創作の道に入り出した。長男の賢一さんはですね、家庭の経済事情のことを慮って美大に行きたかったけれども、すぐ高校出てからそれこそ広島とか宇治や大阪に働きに出て行かれた。

(4)秋の庭

息子さんも実は絵を描いてたんです。シスコさんは一度自分も大きな油絵を描きたかったと。で、長男賢一さんが家に置いてた 100 号、このスクリーンより一回りちっちゃいぐらいですね。大きな絵をですね、包丁で削り落としてその上から絵を描いてしまわれたんですね。ここで注意したいのは、よく紹介とかにすごいドラマチックに、「シスコさんは 53 歳の時に突然油絵を描き始めました」みたいになってるんですけど、まあそれはちょっとセンセーショナルな言い方で、実は絵を描くことはスケッチもしてたし、小さい油絵も描いていた。突然何かが降りてきたかのように描きだしたのではなく、やはり絵を描きたいという思いを募らせていた。そのさきに繋がってたってことをちょっと注意を払いたいと思うんです。賢一さんが久しぶりに実家に帰ってくると自分の絵をはがされた上に絵が描かれていて、「母さんなんばすつとね！」と、すごい怒ったところ、シスコさんは小さな声で「私も大きな絵ば描いてみたいとね」。すると賢一さんは優しいですね、「素晴らしい、アンリ・ルソーのような濃密な感じがする、これはもう僕は母さんの絵を支えていこう」と。実際非常に、夜の庭にブルーの草があってちょっと暗くて見にくいんですけどここに鈴虫が羽を震わせてリーンリーンと鳴いている。素晴らしいいい絵です。ちょっとこんな感じで、覚えて置いていただきたいんですけど、50 代の頃はこういういわゆる市民展とかに入賞するうまい絵を普通に描かれていたんです。

(5)シスコパラダイス

シスコさんは 1970 年万博の年に、お仕事の都合で大阪の枚方長尾に住んでいた賢一さんと同居するためにこっちにいらっしゃいます。そこからシスコさんは花開いてですね、時間空間を飛び越えた独特の世界を醸し出して行きます。そして最後の方は認知症にもなられるんですけど最後まで絵筆を握り続けて 91 歳まで描き続けました。

2、3 年前にですね、全国巡回で「塔本シスコ展 シスコ・パラダイス かかずにはいられない！人生絵日記」という展覧会を企画しました。滋賀県美などご覧になっておられるかもしれません。日曜美術館ご覧になった方もいるかもしれません。私、これ大阪の方だから通じると思って今日伝えたかったんですが、初めシスコ展のタイトルってこうじゃなかったんですよ。でも塔本シスコってあまり知られてなかったので「シスコ展」ではあんまり伝わらない。どうしようって、さっきお見せしたように日記のようなものが絵の裏に書かれたり、絵が日記のようになってるし、それが発想の源になって「人生絵日記」だね！と。もう一つ、なんかパラダイスだと思って。パラダイスって皆さんなんかテレビ番組で覚えあり

ません？ 探偵ナイトスクープっていう番組で、ある自分の世界観で空間をつくり出して、それが独特で魅力的でみたいなのをパラダイスっていう紹介するシリーズがあるんですけど、そういうある種、誰にも何も言わせなような力、何か幸福感が溢れる世界だということです。「パラダイス」がこれが例えば「サンクチュアリー」とか「ヘブン」とかだとまたちょっと意味が違ってくると思うので、パラダイスっていうちょっと面白い感じもあるっていうのを関西の人ならわかっていたいただけるかな。西日本生まれの学芸員さんにはニュアンスが伝わりました。もちろん世田谷美術館や熊本市美さんにも大賛成をいただきました。はい、そしてシスコさんは何でも画材料に使うのが特徴なので、しゃもじにも絵をかくし、パレットはお魚とか入ってるあのトレイとか、ヨーグルトカップとか「もったいなか」って言って使っていました。

(6)山つつじ

長尾に来てから最初の方に描いた絵が《山つつじ》という絵になります。こうガッシュのような白いとても質感のある背景になってて、この絵はですね、ちょっと余談なんですけど世田谷美術館で俳優の椎名桔平が、「これいいね」って言ったらしいです。プライベートで見にいらしたようです。

で注目したいのはここですね。額は息子の賢一さんが作ってくれたんですけど、裏にですね「枚方市長尾町のアラ池の山つつじ」って。おそらく賢一さんが採ってきてくれてそれを描いたそうなんです。

(7)井戸

長尾に借りていた家です。取材に行った時に「すごい！これはシスコさんが呼んでくれた」っていうふうに思ったんですけど。「この辺りよね」って住所を頼りに探していると、ちょうどこう重機が家を取り壊している農家があって、もうここ取り壊してこれから更地にして建売住宅にしますみたいな、まさにその時に、「ここら辺に塔本さんが住んでたと思うんですけど？」と聞くと、「あ一日通に勤めてた塔本さん家やね、絵を描いてた」みたいな感じでした。で、この井戸は埋まってたんですけど、重機でいろいろ壊してた途中でしたから、またこれが現れた、という日にちょうどこれを今日取り壊される日に。すごいです。

長尾駅があって川が流れて、でちょっと小高くなっているところにこの家があった。いま見えませんが、でも当時は長尾駅の方がわーと見えてたんですね。井戸の周りに水槽を作ってもらって、金魚もいろんな種類飼ってて、そうそうかえるさんも行列してたりとかして、すごい可愛いんですね。ちょっと拡大してみましようか。出目金がいたりすごいんですよ。一から卵から育てて「大きくなったら絵に書いてあげるからね」ってシスコさんは言ってたんです。自分でモチーフを育てて愛して。

でちょっとこの絵に不思議なところがあるんですが奥に耕運機みたいなのを押している人が田植えをしていて、後ろに機関車。私も長尾に住んでましたので、1970年にSLあった

かなと思ってすごい不思議だったんですね。

(8)長尾の田植え風景

もう 1 枚絵を見てみます。これもシスコさんの代表作の一つになります。《長尾の田植え風景》。シスコさん、自分でひまわりを植えて自分が描くものを自分で育てて、向こうに生駒山地が見えてるかもしれないです。水槽も見えています。ちょっとこの絵について、何が見えるかっていうのをお隣同士の間でちょっとお話してもらってもいいでしょうか。

※迄、映像不備により文字起こしなしの為スライド内容補記

いかがでしょうか。同じ絵の中で、違う時間・場所が集められた初めての作。「大阪の田植があまりにさびしいけん」と、1970 年の長尾の機械式田植えに、故郷の早乙女達の情景を合わせた異時同図法の作品で公募展に入選して自信をつけた作品です。

拡大してみましょう。ツバメ、チョウ、トンボ、カエルがいますね。熊本と大阪共通の生命の営みです。すべてを照らすように輝くひまわり。うねる花びら、裏向きの花。枚方の長尾を描いた代表作です。

シスコさんがスケッチブックをもって庭に立つ写真と比べると、そっくりですね。アルバムには、「長尾で自分でヒマワリを咲かせて描いた入選作品」と書き込まれています。

《松橋一椿一長尾》では、つらい水汲みの思い出のつるべ井戸と故郷・松橋の家、ポンプ井戸のある長尾の家を、椿の花の左右に描いています。バック走行をしている蒸気機関車が、時間・空間共に離れた二つの家の背後に走っています。京都の鉄道博物館の学芸員さんにシスコさんの絵を見せたら、「機種は大事なところが花瓶に隠れていてわからないけど、確実にこの絵から分かるのは逆機走行をしていることです」とおっしゃっていました。

そこで調べてみると、シスコさんの故郷の家からは、鹿児島本線がよく見えました。昭和の初め、力強く進む蒸気機関車は、近代の象徴、遠い場所へ連れて行ってくれる存在として、シスコさんの脳裏に強烈に印象付けられていたと思います。《不知火長浜の朝》《ウマイレガワ》《古里の家》など、故郷を描いた絵には、必ず、煙を上げて走る機関車が書き込まれます。鹿児島本線では昭和初期ごろ、逆機走行をしていたとの地元の方の証言もありました。ですが、シスコさんが枚方に来る直前、1969 年に鹿児島本線は複線化・電化して、蒸気機関車は姿を消していたんです。でも、片町線では、逆機走行がまだあった。当時の鉄道便覧を調べたら、1日に1本くらい逆機走行をしていたことがわかりました。シスコさんは、久しぶりにみた片町線の逆機走行がトリガーとなって、子ども時代の光景が蘇り、時空を超える描写のはじまりとなったのではないのでしょうか。

証拠として、昭和 30-40 年代の片町線、津田一長尾間を走る蒸気機関車の写真を、枚方市史資料室で見つけました。逆進していますね。《長尾駅》は、昭和 45 年頃の長尾駅の写真と比べると、白い木の駅舎がそっくりですね。

こうして、《長尾の田植え風景》を描いた翌年、シスコさんは息子・賢一さんの結婚に伴い招堤団地に移ります。その年、片町線の最後の蒸気機関車が姿を消しました。シスコさんは、

団地の4畳半の自室をアトリエに次々と絵にしていくのです。※

(9)絵を描く私

お弁当箱をもっている？パレットのこの指はどこから出てきてる？手かな指かな？

キンケイ（鳥）のおっぼを描いているのはシスコさん。シスコさんも絵の中にいる。これはプロ用語で言うと画中画。画面の中ではあるんですけどそれを彼女はとても無意識にテクニクとか関係なしに自分の中で実現してるんですね。

で、絵の下にはですね「1993年6月9日に完成『結婚の儀』祝賀パレード19万人」。今の天皇陛下と雅子皇后ですね。国家的なにぎやかなことが大好きだったので、こういうことも絵に描き込んでいました。お孫さんが卒業した後の招堤小学校に行って校長に頼んで学校で飼ってたキンケイを描かせてもらいました。シスコさんは小学校四年生までしか学校に行っていないので学校に行くのが多分とても好きだったと思うんですね。そういう憧れを大人になってから、持ち前のコミュニケーション能力で実現させていく。ハナミズキと手前のショウブの花とシスコさんと鳥が並列で存在感が同じになっていてとてもおもしろい。

(10)春の庭

シスコさんの作ったお庭を描いた一連の作品があります。綺麗ですね。本当にシスコさん紫の色がすごい綺麗なんです。熊本から取り寄せた白いタンポポの綿毛がふわーととんでいて、この紫のとこだけだったら「綺麗な絵だよ」っていうだけなんですけど、おもしろいのが水ガメを抱えた女の人の像みたいなのがあって、これは思い出してください。シスコさんが脳溢血から回復するとき包丁で削ったあの最初の創作。あの水ガメを持った女性というのが彼女の中でずっと一つの創作の源泉であり続けたんじゃないかと思います。それが庭にあって。

(11)秋の庭

秋の庭。裏に「わたしが植たニガゴリ ニガゴリがうれると割れる。甘いドロプスロジャの目ちょうが来て口しゅるを吸う」。多分ゴーヤかな。

この右端に居るすごいエキゾチックな音楽隊は本当はテラコッタですね。息子さんの賢一さん夫婦がやってた絵画教室で子どもたちがつくる粘土をちょっとわけてもらって、テラコッタの素朴な何の彩色もされてない茶色い人形を作ってるんですけど。それを絵の中で着飾らせてインド風というかバンジョーみたいなのもたせて絵の中で自由に表現している。右上にいるのがお孫さん。お孫さんとシスコさん。お孫さんとしてはこんなことをした記憶はないけど、シスコさんはやっぱり絵の中で自分は綺麗な着物を着て、可愛い孫と写真を撮りあったというシーンを夢の中で描いてた。今も彼女にとっての着せ替え人形というか宝箱みたいな、好きなものをどんどん詰めた世界。

(12)NHK がやってきた

あるクライマックスがきます。なんかよく描いてるおばあちゃんが団地にいるらしいということで1993年ぐらいだと思っただけでNHKの取材がやってくるんですね。配布資料にある年表を見てもらうと、黒丸がついてるのが個展や家族展とか嫁姑展とかいろいろやってるのでNHKが取材に来てくれた。これもさっきの庭ですけど、どんだけ広い、うっそうとしたところなんやろうって感じがするじゃないですか。

だけど写真撮ったのをみると、ベランダの前のこんな感じなんですよ。普通はもう私たちは、美術教育とか西洋絵画というものに感性を乗っ取られてしまっているんで、一点透視法で物は重ねて描くようになってるんですけど、彼女は自由そのもの。存在すべてを描いてあるから、ある種こう上に上に横に横に存在が描かれていくので、この写真の情景がこうなるんですね。でもそっくりですよ。NHKのマイクをかかえている白いブラウスで茶色いチノパンのお姉さんもいます。犬とか連れてる人が散歩の途中見に来てるし、自分が育てた花も入っている。「私にはこがみ見えるったい」というパラダイスがちゃんと描かれています。

(13)塔本シスコはキャンパスを耕す

庭の絵で傑作があって。彼女の言葉も研究対象になると思います。《自分で植わったかぼちゃ》って。生ごみなんかを土を肥やすために埋めといたら、そこから芽が出て「自分で植わった」と言っています。「自分で植わったかぼちゃ」ってかぼちゃどこだろうと思ったら、一瞬私これかぼちゃの花なのかなと思ったらこれは違う。オシロイバナ。これ、バツタ乗ってるオレンジの花がかぼちゃの花で、絵の裏には「庭ニウメタゴミノナカカラ…メヲ出シ実ヲツケタ。ユスラウメノ上ニオオイカブサリ ユスラウメカワイソウ」。

かぼちゃを描いてるからといってかぼちゃだけに焦点が当たっているわけじゃなくすべての存在を描き出して、絵の中に年齢を書くのも彼女の特徴です。お年を召した女の人って特に年隠しますけれども「私85歳でこんなことをしています。まあ80何歳でこんな思い通りに絵を描けるようになりました」ということを誇らしげに書いている。息子の賢一さんのお嫁さん浩子さんが、シスコさんの画集に「キャンパスを耕す」というタイトルをつけていまして、本当にいいタイトルですね。彼女キャンパス耕している。

(14)畑の写真

シスコさんは家の近くに畑を借りてこんな感じだったよと言う最近撮った写真なんですけど、野菜を育てるのと一緒に絵も耕す。それからこのベランダのところ、今違う人が住んでますけど、シスコさんが金魚とか飼って猫が餌をねだりに来ていたベランダ。この壁がシスコさんが絵を立て掛けて描いて、近所の子供たちが遊びに来て「何描いてるの」って。これはすごい綺麗な用水路で、さらさらと流れてここで水を汲んでこの近所に借りた畑に水をやりに行っていた。お孫さんに聞いたら、シスコさんすごい小柄で140何cmしかない人だったので、自分が通学してる時に、おばあちゃんが土の袋引きずりながら歩いてめっちゃ恥

ずかしかった、と言ってるのがすごい可愛くて好きなエピソードです。こんなところでいろいろな絵が生まれていきます。さっき言ったみたいにいろいろな人が住んでいる団地だったんですね。

(15)枚方市立招堤小学校

当時の招堤小学校の資料をちょっと見つけてきたんですけど、学校の先生が全児童にアンケートとして、「お父さんお母さん出身地どこですか」ってきいたら、九州が大阪府より多いんですよ。なのでシスコさんは九州の人が近くに住んでるって見つけたら訪ねて九州弁でお話するのを楽しみにされてた。

この資料では「あなたはいつ招堤地区に住み始めましたか」とも聞いていて、やっぱり 1971 年から 1975 年頃がすごく急激に多い。シスコさん一家は本当に枚方市の歴史とともに歩んでいます。

(16)航空写真

で、招堤小学校や招堤団地が、こういう位置関係です。これが当時シスコさんが招堤に住み始めた頃の航空写真です。山田池公園、1 号線はこっちですかね？

会場：<合ってる。

良かったです。こういう感じでかなり大きな道を挟んで向こう側なんで、近いけどなかなか一人では行けないと。シスコさんにとって山田池公園はちょっとお出かけのハレの場でもあったんですね。

(17)山田池の春

で、山田池公園を描いた一連のシリーズをご紹介します。公園の由来になっている平安時代からあるため池を描いた絵です。右上にある柵みたいなのは、鴨場があって、ボランティアの方に聞いたら、当時餌付けしてた、そういうのがあったと。大事なのは左下の方にピンクの全身タイツみたいな女の人が木にこうやってるんですけど、これは老いた木の精で、春になって一斉に生き物がこうバーッと花開いているときに描かれた。木の根元からヒコバエみたいなのが生えてきて、シスコさんはそれを大事にしていた。いつか自分も老いてしまうけれど周りの人が楽しそうにしてるのを見て自分も楽しく喜んでるんですという様子。シスコさんのある種の霊性が現れて、大事な重要な意味のある絵です。

(18)山田池の風景写真と絵

せっかくなので、枚方でしか紹介する機会がないので紹介させていただきたいんですけど、調査に行った時に山田池公園の所長さんがめっちゃいい人で、私が「この絵を描いた画家がいるんですけど」と、シスコさんの 1980 年代 90 年代の写真を出したら所長さんが今こんなですって写真撮って送ってくれて。六角堂みたいなのも残ってます。私も別に枚方生まれ

というわけではないですし、両親もそうでもないんですけどやっぱりこう何十年経っても変わらずにある風景みたいなものがあるっていうのがやっぱり一種ふるさと性だと思うのです。家とかは変わってきたとしてもこういう変わらぬ光景があることがすごい大事なことだなど。

「シスコさんが座ってた岩がこれじゃないか?!」ってその所長さんが見つけてくれた岩がこれになります。

(19)ミーのキャットフードをもって

この絵、私すごく好きなんです。いいですね。シスコさんを中心にハトが放射線状に広がって、中に黒いハトがいるんですけど絵の裏にシスコさんの言葉があって、「ミーのキャットフードを持ってハトに餌をやりませう。チョットはなれたところに黒い弱いハトがいましたそれにエサをやりたいたいのですがすぐにほかのハトにとられてしまいますのでこまります。」後ろに幼稚園児みたいな人がこう並んでるんですけど実際にいたかどうかわかりません。シスコさんにとって楽しいとかそういう表現が子どもたちの行列なんですね。

左下、息子さんの賢一さんが写真を撮ってる、このなんか人魚みたいな白い服が変だと思うけどでも絵の中でこれが実際赤や青だったらどうでしょう。ここに白が必要。すごい色彩感覚だと思います。

後ろに見える水色のが山田池です。向こう岸の木立は手前の木立と同じぐらいの大きさに見えるし木の上にとまってる白サギもすごく大きく見えている。写真撮るところは写らない。自分が知っている池のむこうは木立があるし、白サギはこういう形であることがはっきり見えているので、こう描く。私たちは写真をリアルを写し取る機械だとか、線遠近法は立体空間を二次元に表すための唯一の方法であると思っているけれども、遠近法っていうのは文化によって全然違うんです。遠くのものが小さく見えるのはルネッサンス期にイタリアで発見された現実認識の方法。二次元に立体を写し取るための方法ですね。例えば日本だったら絵巻物だったらファーツと雲がこうあると時間も空間も超えて、源氏物語絵巻物のような絵巻物中の屋根も壁もない、寝殿にお姫様がいてる。日本人はそういう遠近法によって時間と空間を平面の上にあらわす。シスコさんは自分で自分の遠近法を発見しているところがすごいです。

(20)花しょうぶの精

山田池は菖蒲園も有名ですよ。

シスコさんは冬の間、そこにあるような日本人形を作っていました。お外で絵が描けないので。ご近所の方に余り布を頂いて。時代劇も好きだったんですよ、それを絵に登場させるんですよ。立体性をお見せできないのが非常に残念なんですけれども、この菖蒲の精みたいな花の花芽の中に居る人が盛り上がってるんですよ、お鼻が真ん中が高い。やっぱり顔は歌舞伎役者は中高が、美形の一つの条件。これは女性ですけど。絵具は色を表すための画材であると

私たちは思ってるけど、シスコさんは立体を表す一つの粘土的なものとして美人さを表した。ここに盛り上げて、鼻筋をきれいに描いてあげたい、と何回も塗っていくうちに自然と盛り上がっていく画材の自由さが非常に面白い。唯一無二の作家です。

(21)山田池のもみじがり

春夏秋冬ときて秋、所長さんが写真を撮ってくれた山田池のもみじ谷のとおり。人の顔より大きい紅葉が花筏みたいに流れ、道ゆく知らない人が話しかけてる。

(22)シスコ牛年

で、これは梅林も有名ですよ、山田池。賢一さんに連れてってもらわないといけないハレの場所だったのでちょっとおしゃれしてる、マチコ巻きみたいになって可愛いニット着てるんだけど、牛つれてるんですよ。丑年だから。かわいいです。山田池はすごい野良猫がいて、猫は本当にいたんだけど。この写真すごいそっくり。ちょっと天井が抜けてて木立の中でね、空が見えてるのとか。多分写真を参考に描いた感じなのかなと思いますけど、写真にはない牛がでてくる。。

シスコさんって、すごく言葉も重要な作家さんなのですが、巡回展するときにほかの館の学芸員さんが「これ間違えてるから干支の丑って違うし直しましょう、間違いです」って。でも私はすごい大事だと思ったので、「これはこのまま行きましょう！」と。

ちょっと枚方市民として褒めてほしいですけど、さっき最初に出てきたひまわりの《長尾の田植の風景》も、なんか《ヒマワリに見える風景》とかほかの題も色々あるんですよ、当時展覧会毎に題名も自由に変えていたんです。巡回展でも変えそうになったけど、私は「これ多分長尾って、すごい大事だから長尾にしておきましょう。《長尾の田植風景》のままにしておきましょう」って頑張ってる。もう単に枚方市民としても本当に学芸員としてもそうと思いましたので頑張りました。

(23)山田池春のスケッチ

遠足に来ている園児と合流して。《山田池春のスケッチ》

(24)枚方総合体育館前のコスモス畑

そういう風にとっても順風満帆に見えるかもしれないんですけども、シスコさんの一人娘で、ふたり子供さんいらっしゃる女性の方、50代にして、病気で、亡くなってしまわれた。シスコさんは、それを知ってから、非常に悲しんで、おふとんから出てこない。

その時に賢一さんが「おばあちゃんコスモスでも見に行こうよ」と言って。枚方総合体育館前の休耕田にコスモス育てている人がいて、その頃多分ちょっと名所みたいになっていて。で、そこにちょっとスケッチに行くと、まあちょうど園児たちも歩いていてちょっとスケッチして元気が出た。えっと、これも‘コスモス畑’みたいなタイトルもありだったんですけど、

「これは総合体育館前っていうのがすごい良いので残しましょう！」と言って頑張りました。

で、これも取材しました。上の細長いのが当時のスナップ写真ですね。シスコさんの奥に園児たちが行列して、奥にはちょっと体育館が見えてます。下が最近撮った写真なんですけど、すごいのがですね、この絵の鉄塔みたいなのが実際あって、この鉄塔の隣のなんかあみめみたいな何かと思ってたら、このなんかおしゃれな煙突のある家みたいなのがあって、「あ、この辺煙突だ」。でその隣の橋みたいな、茶色いトラックみたいなのが走ってるんですけど、高架が描いてあると。すごいリアリティがある。でも多分シスコさんの目線にはトラックは見てないはずなんですけど、あの橋の上にはトラックです。ドローンもない時代に縦にも横にもすごい。想像力がすごいです。

(25)地図資料

位置関係を整理しておきますと、右上が国鉄、JR。大阪に来て2年間くらいこのエリアで描いて、そこで蒸気機関車が記憶のトリガーとなっている。招堤団地ではさまざまな「私の庭」を描いている。山田池公園は一つのお出かけ先で、お絵描きパラダイスだった。枚方総合体育館はもう一度失意から立ち上がる場所として描かれている。

枚方市の特徴として、京都大阪奈良の中間地点ですけども、息子の賢一さんは、よくいろんなお出かけ先に連れてってあげてます。それはやはり一つの喜び。絵日記は、毎日描くわけじゃない、出かけたら描くわけじゃないですか。この地理性っていうのは非常に大きなモチベーションになっていると思います。

(26)造幣局の桜

造幣局ですよ。一度行きたかったんでしょうね。家族いると思うけど息子の賢一さんと2人で行ったことになってる(笑)。嬉しかったんだろうなと思います。

造幣局の満開の桜の木の間にとまってるの何かわかりますか？ウサギです。桜だけで本当はいないんだけど、「可愛い！楽しい！」みたいな表現が木々の間にウサギとして生まれてくる。決していい加減に描いているわけじゃなくて、八重や雪洞だったり黄色い桜だったり、造幣局はいろんな種類があるのが特徴じゃないですか、それをきちっと。やっぱり植物に関心がある、自分で植物を育てている人だから描けるんですかね。

(27)野外彫刻展

1990年の花博、すごいコミコミでしたね。跡地利用で今は鶴見緑地公園になってるんですけど、野外彫刻展みたいなのがあった時に息子の賢一さんが入っている美術家団体が彫刻展みたいな感じで出品していて、それを見に行った。でも彫刻展は本当にこんなにコミコミではないと思うんですけど、おそらくは花博の記憶を蘇らせた感じ。

このカメラ構えてる人が賢一さんでこの万歳してるのがシスコさんなんですけど。これす

ごい傑作なのが絵の裏に、「どっちが上でもよかです」、て書いてある。どんな方向にもかけられる。シスコさん 140 何cmこれぐらいしかなかった。こんなすごい大きい絵なんですけど、手が届かないので、団地の壁でぐるぐる回しながら描いている。しかも軽い段ボールに描いてるんですよ。だから絶対イーゼルに立派に立てかけて描いてたら考えられない。自分だからこそこの表現が生まれてる。シスコさんも楽しいので分裂しているんなところで階段のところののってたりとか。

兵庫県加西市の植物園に行ったときとか、淡路島に行ったとかいろんな‘遠足’の絵が残っています。

(28)ネコの絵

またもう一方ですね、猫も好きで、当時山田池公園は猫を捨てに行く場所だったらしく、ベランダとかにも遊びに来てたらしいんですけども、「田ンボの中でエをとってハシリマワリ大キクナつた男ノ子デシタ。子ドモカラオッカケナガライキテキタネコデス。」おそらく網戸とかにこうやって「入れて！」みたいになってた。本当に何にでも描く、ウイスキーの瓶とかお中元のおそうめんの箱とか。

(29)アロエ

比較で見たいんですけども、シスコさんがアロエを描いた作品2つですね。82歳のときにかいたアロエ。タイトル《アロエの花は冬に咲く》です。水瓶を抱える3つ顔がある女神像。同じ《アロエの花》。2004年、お亡くなりになる前年で、ちょっと映写すると色が悪くてあれなんですけど、現物はもうとてもきれいなブルーとオレンジがぱっと目に入る、補色関係のいい絵です。やはり体力的な問題もあって絵具の混色ができなくなることがあったのかもしれないけど、それによって非常に激しい色彩が生まれた。その年齢なりの表現がある。

熊本から持ってきたアロエ、シスコさんが50代ぐらい、50になった頃にベランダの下に植えたアロエ。他の植物は撤去されてるんですけど、このアロエはもう50年ぐらいここにいますね。

以下より※(34)冒頭迄録画不備により文字起こしなしの為スライド内容補記

(30)シスコの女神

1960年代、シスコさんの最初の創作、脳溢血からのリハビリで、包丁で削った石の女神。井戸がシスコさんの重要なモチーフでしたよね。女神は、無限に水が湧き出る水瓶を抱えています。これは、子宮や母性かもしれないし、湧き出る創作の源でもある。1990年には、こんなに可愛い《鳥の精》をつくっています。これも、おなかに巣穴、泉がある。1997年、娘さんが亡くなった翌年には、仏画か曼荼羅のような《シスコの女神》を描いています。この額装は、息子の賢一さんがシスコさんの着物を使って作ったもの。シスコさんは、賢一

さんが使うキャンバスの包装紙に描いています。シスコさんの最初の創作である女神と同じ、3つの顔があって水瓶をかかえて、小鳥たちが歌っている。とても重要で象徴的なモチーフであることがわかります。

(31)《88才のプレゼント》《90才のプレゼント》

いずれも100号の大作。88才の誕生プレゼントに、孫2人からもらった大きな花瓶と百合の花を描いています。スケッチでは、百合はつぼみだったことがわかりますね。油絵のほうでは、満開になり、咲き誇っていく様子がモリモリと描かれている。自分が描きたいというのももちろんあるけども、絵でうれしさのお礼を返す、「孫に喜んでもらいたい」という気持ちが後押ししている。作品自体がコミュニケーションだから世界に開いていく表現となっている。何かにつけて絵を描いて、その絵を喜ぶ人たちに囲まれ、シスコの喜びもまた大きくなっていきます。

90才の時は、88才の時にもらった大きな花瓶に、孫の賢一君からもらった花束を生けました。最後の100号サイズの作品です。2001年に貧血で倒れ足もたたないような状態でしたが、筆をもつしゃんとしたといいます。チューリップが開ききって花芯が見えるのも、「枯れた」と捉えていない。つぼみ、開花、散るまでのあらゆる瞬間が放射されています。こうしてシスコさんの絵を振り返ると、どこか抒情的だった初期・熊本時代から、長尾の蒸気機関車をきっかけに空間や視点が自由自在になって、次第に構成が多彩で複雑になり、招堤団地で盛った絵具が凹凸を呈して幸福感があふれる“シスコ調”が開花していくことが迎えますね。

(32)《シスコの月》

筆の圧力や絵具の凹凸が成す絵肌の厚み、大らかさ。人生の歩んだこの年齢にしかできない2004年の絶筆。大きな○(マル)を人生につけて亡くなりました。

(33)シスコさんが花開いた枚方ライフ

なぜ、シスコさんは、こんなに花開くことができたのでしょうか。

芦屋市美術展は、自治体主催の公募展のなかでもレベルが高く、前衛画壇の登竜門と言われていました。というのも、関西発の前衛美術グループ・具体美術協会のメンバーが関わっていたのです。芦屋市展は、「人のまねはするな」と具体を率いていた吉原治良が審査員をし、具体メンバーも出品していました。絵本『もこもこもこ』で知られる元永定正や、アクションペインティングの白髪一雄も。1980～81年に芦屋市展に出品・入選したシスコさんは、会場を観に行き刺激を受けたと思います。息子賢一の画家仲間も、「よかねえ!」「いいねえ!」とシスコの絵を誉めましたが、それは、「おばあちゃんがヘタウマな絵を描いて偉いねえ」ではなく、で美術家同志として認めていたのです。

それから、郊外都市・枚方とシスコを応援する人たちも大きな役割を果たしました。熊本か

ら来たばかりのシスコさんが、まずは長尾の田園風景の中で伸び伸びと過ごし、それから団地の一期入居として、鳥や猫も飼いながら新しい生活を築いていった。ちょっと奇妙で愛しくマジカルなシスコワールドは、独創性とユニークさを何より評価する関西の風土で花開いたのです。

さらには、枚方の文化政策です。昭和4年にここ御殿山に大阪美術学校が開校し、跡地にこの御殿山美術センターが建っているという歴史がシスコさんにも関係してきます。まず、1980年、枚方市民ギャラリーが、枚方駅前サン・プラザビル3号館2階に開設されました。府内で市民ギャラリーは大阪市・豊中市・箕面市しかなく、当時としては先駆的。単なる貸会場を超えた理念で運営されて、美術を愛する市民にとってなくてはならない施設として1992年まで利用されています。配布資料の年表をみていただくと、枚方で開催した展覧会で、黒丸「●」が家族によるもの、黒四角「■」が公的な企画。●から始まり■が多くなるのがわかりますよね。1982年から市民ギャラリーで開いた家族展を皮切りに手作りの展覧会を重ねています。1987年には御殿山美術センターが開館して、1996年に市の企画で取り上げられ、2002年は「枚方の美術家展」シリーズで個展が開催されました。15年くらいかけて、貸ギャラリーから枚方市主催の企画へ。さらに20年くらいかけて今日の催しになっている。訪れる人に、「どがんねえ、よかでしょうが」と気さくに話しかけるシスコさんは、次第にその奔放な画力と独特の個性で高く評価されるようになり、シスコさんという素朴な画家が周りの人たちの目を開かせていったといえます。

文化政策的に言えば、市営ギャラリーという「発表」の場、美術センターという「創造」の場があり、図書館や公民館の充実など普及事業を継続したことで創作と鑑賞が生活に織り込まれているからこそ、シスコさんが発表でき、その表現を認めるほんとうの「見る目」を持つ人たちが現れ支援していたともいえます。1970年代から、かつて兵器製造所のあとや田が団地になるなど住宅中心の街づくりが行われ、文化的平和的な街になっていること。こういった文化的環境がシスコさんが花開いた枚方ライフの背景であることを、市民はもっと誇ってよいと思います。そして、自然環境も。忘れてはならない身近な自然公園「山田池公園」は、シスコの創作のバラダイスであり続けました。

実は、美術館デビューのきっかけも枚方市です。1995年、枚方市民ギャラリーで開かれた「夢と幻想の世界 ハンガリーのナイーブ・アート」の関連講演会で、世田谷美術館学芸部長が講演をしたところ、枚方市役所の武田氏が「ナイーブ・アートといえば、枚方にもこんな人がいますよ」と紹介したのがきっかけで、3点が世田美に収蔵されました。画家にとって、公立美術館に絵が収蔵されるのは価値あることです。

(34)シスコさんのどこがすごいのか

まず、「日常の積み重ねから生まれた強靭さとユニークさ」です。「もったいなか」精神に描くことへの並々ならぬ意欲が重なり、戦前世代が消費社会でいつか何かになるだろうと取っておく箱やパッケージや布など、日常の積み重ねが作品になっている。

2 つめは、「ずば抜けた色彩感覚」。

3 つめは、「類を見ない全体構成の複雑さ・多様さ」。シスコさんの場合は作品ごとの変化がすごい。複雑な構図を読むように観るのは、シスコさんの目で見るとの体験。ぐっと小さく引き寄せ観察したり、自分の感性と目で参加して、シスコさんといっしょに能動的に世界を受け止め、引き込まれます。逆に言えば、シスコさんの絵を好きな方は、知識ではなく絵を見られる感受性があるということ。

4 つめは、自然の摂理もよく知ったうえで「年をとればとるほど独創的になっている」。いくつからでもいくつになってもという、人生100年時代の生き方です。熊本時代は普通にうまくて、70から80代が最盛期。常識的な論理に捕らわれず、“いちばん元気だった”と言われます。90代には認知機能が低下して色覚が変わってこそリーチできる世界にはみ出していています。

5 つめは、ありのままに、「体験に基づく具体的でパワーのある絵」なので引き込まれます。自分らしさが最強の作家性です。

最後は、「自分にとって肯定的かつ重要なイメージを描いている」。好きという感動が創造の源で、人はなぜものをつくるのか、作り続けてしまう人、シスコさんに教えられます。

(35)時代とともに、時代の先に

次は、時間のスパンで考えてみます。

シスコさんは、大正・昭和・平成の3つの時代を生きました。江戸時代に開拓された九州の干拓地から大阪の郊外都市へ、地方から都市へ、戦前戦後から高度経済成長へ、という時代を体現しています。

それから、独学、つまり芸術的文化によって傷つけられていないからこそ、知識ではなく対象の美しさとあたたかさ、正直さを読み取る力を持っていて、精いっぱいいきる姿を描いているので、私たちは魅了されるのですね。※

もう一つは息子夫婦が同じ仕事、絵画教室をしていたんですね。それってきっとシスコさんにとって、ある種の男女の役割を等価にしている。ちょうどその頃サラリーマンのお父さんとお母さんが専業主婦でおばあちゃん家にいてみたい家庭が多かったんですけれども、シスコさんはいわゆる孫の世話をするおばあちゃんという枠にしばられなかった。おばあちゃんという役割以外の選択肢がちゃんとあったってことが大きい。

最近は一歩ブリューットいわゆるアウトサイダーアートが注目されてるんですけども息子さん夫婦の絵画教室で例えば知的障害のあるかたもたくさん通ってたと聞いてますので、そういう表現や、こういった画材とかに触れることによって息子さんも、ご本人も、周りの方も、シスコさんの表現に対してもくみ取る理解力があつた。

あとはこれは世界的な潮流なんですけれども今までは「黒田清輝の弟子である」とか、「印象派である」とか「キュビズム」とかある美術のコンテクストにのってくる作家しか評価されなかったんですけども、世界的にも高齢であるとか学校に行っていないとか独学である

とか自分だけの表現である、女性であるとかそういう今までこぼれ落ちていった表現をもう一度見直す潮流が来てるんですね。シスコさんは、今まである種こぼれ落ちていたアーティストかな。今の私たちの現代美術史感とか絵画の見方みたいなことをアップデートさせてくれるような存在。

一言で言えば時代がシスコさんに追いついた。ちょっとほめておくとそういうシスコさんの創造的環境が枚方にあった。枚方の文化政策としてもあったと言えます。

(36)シスコさんを応援したくなる気持ち

これすごいかわいいですね。認知症を発症された後の絵です。いろいろ難しいことを最後に言っちゃったんですけど、要はシスコさんの絵を見てるとシスコさん応援したくなるじゃないですか。それってきっと誰かを応援したくなる気持ちになるし、もうそれが自分にも還ってきて自分を応援して自分を肯定して生きていくパワーがすごいシスコさんの絵にある。ちょっと伝えたいことがありすぎてめっちゃ早いんですね。すみませんでした、はいこれで終わりです。